

小麦トラストにおける国産小麦の流通経路の形成に関する考察

—「北海道食の自給ネットワーク」の活動を事例として—

共生基盤学講座 食料農業市場学分野

長内 一人

【問題意識と課題】

今日、国内市場では諸外国からの廉価な輸入農産物に大きく依存する形をとっており、国内生産者と消費者の関係は希薄化していると言えよう。中でも、国産小麦は 1960 年頃からその生産量を減少させてきており、小麦の輸入量は 266 万 t(1960 年)であったのに対し、近年はその倍以上の 550 万 t 程度で推移している。小麦の生産量の低下、輸入量の増加の過程で国産小麦の流通の不透明化も進行した。国産小麦は保護制度や流通の仕組みから、産消間でお互いに顔の見えない作物として距離を保ち続けてきた。こういった状況下で、「北海道食の自給ネットワーク」では 2002 年より 10 年間にわたり小麦トラストに取り組んでおり、国産小麦における透明な流通の形成を実現した。

そこで本論文では、「北海道食の自給ネットワーク」による小麦トラストが、多様な加工メーカーが介在する国産小麦の流通をどのように取りまとめ、流通経路形成を実現していったのかを明らかにしていくこととする。

【研究方法】

本論文ではまず、国内の小麦流通の変遷を整理し、そこに孕む課題を捉える。その後、小麦トラストを事例対象とし、その現状と活動内容を把握した上で国産小麦の流通を透明化する為に製粉業者及び製品加工業者との間でどのような対応を行っていったかを聞き取り調査に基づいて把握する。この結果から、本論文の課題を明らかとする。

【結論】

小麦トラストは、製粉業者、各製品加工業者の小麦トラストに対する協力的な対応によって実現に至った。しかし、この協力的な対応の裏にはそれぞれにとって小麦トラストがメリットとなる要素が存在する。すなわち、小麦トラストによる国産小麦の流通経路の形成は、「北海道食の自給ネットワーク」、製粉業者、各製品加工業者それぞれの異なる意向が小麦トラストという 1 つの活動の中に集約されていることによって果たされていることが明らかとなった。